

経済学は役に立つか？

経済学部長 荏開津 典 生

経営学科の発足に当って、経済学の実用性ということについて少し考えを述べてみたい。本学は実学重視を校是としているし、また経営学は少くとも常識的には、実用の学という性質を強く持っていると考えられているからである。

私はこれまでに何度か「経済学者でお金持になった人はいるんですか？」と質ねられたことがある。私はその都度いいかげんな答をして来たが、そういう質問をする人の方には「いないでしょう。経済学なんか実際の役には立たないんだから」という気持ちがあることはいうまでもない。経済学は、実用の役に立つのであろうか、それとも実用にならない「虚栄の市」なのであろうか。

この質問に対する答えは、多分「役に立つ」という言葉の意味によってYesともNoともなるであろう。もし「役に立つ」というのが、先のように「経済学を利用して利殖する」ということであれば、私としてはNoと答えたい。私は生涯私なりに経済学を研究し、経済学者として大学から給料を頂いて来たが、経済学を用いて利殖を図ろうとしたことは1度もない。私のところにも、さまざまな「取引」の勧誘があるけれども、すべてお断りしている。私は経済学を実用の学問であると考えているけれども、利殖のための学問であるとは思っていない。

では、経済学（ないし経営学）は、どのような意味において「役に立つ」のであろうか？私はそれは、よりよい社会・よりよい経済・よりよい生活を探求する努力という意味の他にはあり得ないと確信している。

率直に言って、この努力の成果はこれまでのところまことに貧しいものといわざるを得ない。人間は、宇宙にロケットを送ることに成功し、多くの難病を治す医薬を発見し、海底にトンネルを掘って英佛海峡を連絡することにも成功

したが、世界全体としての社会と経済、人間の生活の実情は、到底「成功」とはいい難いままにとどまっている。しかし20世紀を通じて、経済学はまことに遅々とした歩みながら、着実に前に向かって進んでいると私は考える。

経営学において、とりわけ簿記や会計などの分野は、その実用性という点で直接的であり、理解しやすい。けれども、そのような分野であっても、多分「それを用いて利殖を図る」ことはできないであろう。正しい簿記や会計のあり方の研究は、やはり個人や個別企業の利益を目指すものではない筈である。

いかに遅々たる歩みであっても、よりよい人間社会の探究という大きな目標を失わず、経営学科に迎えた新しいスタッフ、新しい学生諸君と共に、歩み続けて行きたい。